群馬大学広報誌 ”グッデイ”

GU’DAY

November 2018 11

特集：群馬大学手話サポーター養成プロジェクト

人々の多様な在り方を相互に認め合える「全員参加型」の社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取組む重要な課題と位置づけられています。中でも、障害者が積極的に社会に参加・貢献していく共生社会の実現のために、国立大学の担う役割は大きいと感じています。

群馬大学では、障害を持つ学生に対し、様々な支援を実施しています。特に、聴覚障害を持つ学生への支援では、教育学部の金澤貴之教授が中心となって先駆的な取組みを行っています。その一つとして、2017年度から群馬県と共同で、日本財団助成事業「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」プロジェクトを取り組んでいます。

このようなプロジェクトを通じて学術手話通訳者養成のシステムを構築し、本学のモデルを全国に提示して行くことを目指しています。

群馬大学長

平塚浩士

GU'DAY
November 2018

特集 ••• 3

群馬大学手話サポーター養成プロジェクト

Media -Pick up ••• 7

行事 ••• 8

群馬大学基金 ••• 8

群馬大学SNSアカウント

※検索窓をクリックすると、各SNSアカウントへとびます。

フォロー・チャンネル登録お願いします。

@gunma.university

gunma_univ

群馬大学公式チャンネル

今月号の表紙

詩画作家・星野富弘氏作「コスモス」

星野富弘氏は、本学教育学部の卒業生で、詩画作家として活躍されています。
星野氏には、2018年8月、本学の大学名を直筆で書いていただきました。
また、2012年に医学部附属病院に44点の作品を寄贈していただきました。作品は、病院外来 1F「星野富弘 花の詩画コーナー～ありがとう 私のいのち～」で展示されています。

特集

群馬大学手話サポーター養成プロジェクト

手話言語条例が全国各地で制定され、聴覚障害者の様々な専門職への社会進出が求められているものの、学術レベルの手話通訳が可能な人材は不足しています。

群馬大学では、2017年度から手話通訳者養成における大学と地域の連携モデルを構築することを目指し、**教育学部・金澤貴之教授**をリーダーとして、群馬県と共同で手話サポーター養成プロジェクトを推進しています。

プロジェクトにいたる背景
～聴覚障害のある学生を取り巻く現状～

聴覚障害のある学生の授業環境

現在、障害のある方々の大学進学が進む中で、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（いわゆる「障害者差別解消法」）が2016年4月に施行されたことにより、障害のある学生のニーズに応じた支援が法的に義務付けられ、支援体制の整備が全国的に急ピッチで進められています。特に聴覚障害のある学生の場合、大学の活動の核となる「授業」の音声情報そのものへのアクセスが困難であるため、情報アクセシビリティの確保は大きな課題となっています。そしてその具体的な支援方法（情報保障）については、パソコン等で音声を文字に変換して提示をするという、文字通訳による支援が、ようやく全国的に徐々に普及しつつある状況です。しかし、聴覚障害学生の中でも、ろう学校等で手話を身につけたろう学生にとっては、手話こそが母語であり、躍動感あふれる自然言語ではあるものの、手話による通訳での情報保障については、学生を手話通訳者として養成することが困難であることや、地域の手話通訳者が必ずしも学術的な内容の手話通訳に長けているわけではないことなどから、残念ながら普及が進んでいません。

群馬県の動向と大学の取組むべき課題

一方、群馬県は2015年3月に全国の都道府県で３番目に手話言語条例を制定し、かつ、同年12月に前橋市でも同条例が制定されたことで、全国で初めて県と市の双方で同条例を制定した県となりました。さらには2018年10月現在、14ヶ所の市町村でも同条例が制定され、今や全国屈指の手話言語条例制定県となっています。

また、その県条例においては聴覚障害児を対象とする学校における乳幼児期からの手話環境の整備等が記され、市町村条例においても学校における手話による支援が記されている自治体もあります。そうした自治体の動きに対して、教員養成を担う本学としても、広く学生に手話についての知識と技術を教授していくとともに、特に特別支援学校教員を目指す学生には教育現場で活用できる確かな手話の技術の習得が求められています。

このような社会的背景から、聴覚障害者が「手話で学ぶ」環境が一層促進され、さまざまな専門職への社会進出が求められているといえます。そのためにも、大学等の学術分野に対応した手話通訳ができる人材養成は、全国的に求められる、聴覚障害者支援の課題です。

群馬大学の支援体制

そのような状況において、群馬大学では、聴覚障害学生の手話通訳ニーズに対応した支援を実施すべく、全国に先駆けて手話通訳による情報保障の体制整備を進めてきました。2004年度に教育学部で聴覚障害学生への情報保障のために全国で初めて手話通訳者を職員採用したことに始まり、2005年度には手話通訳技術のある職員採用を含む、障害学生支援に関する学内規定を全学的に整備し、そして現在、障害学生サポートルームには手話通訳技術のある職員と、聴覚障害当事者である職員が常駐し、群馬県内で活躍する手話通訳者の方々のご協力をいただきながら、手話通訳ニーズのある聴覚障害者への情報保障に積極的に取り組んでいます。

日本手話を学ぶということ

「手話」とは、耳が聞こえない「ろう者」同士が用いている視覚言語です。そして音声言語が国によって異なり、日本語、フランス語、中国語などがあるように、手話もまた国によって異なり、日本手話、フランス手話、中国手話などがあります。日本のろう者が、ろう者同士で話す時に用いる日本手話は、音声日本語とは同期せず、語順も異なります。例えば、「何？」「どこ？」などのWH疑問詞は、日本手話では文末に置かれます。さらに、手話は手だけで表現されるものではなく、眉や顎、目線の動きや口形などが文法的な機能を果たすことも近年明らかにされてきています。「あなたはどこで本を買いましたか？」という文であれば、日本手話の基本文型はＳＯＶ（主語－目的語－動詞）で、WH疑問詞は文末に来ますから、「あなた／本／買う／どこ」の語順で手話単語が並びます。そして疑問表現として、文末で眉上げつつ顎を動かします。このように、明確なルールがあります。つまり、音声言語と同様に、完成された統語構造をもつ独立した言語であることが、現在は様々な学問的知見によって示されています。　その一方で、手話は長い歴史の中で誤解され続けてきました。聴覚障害児教育の歴史の中では、「身振りのようなもの」であり、「不完全なもの」だと言われ続けてきました。また現在でも、多くの人たちの間では、音声言語に手話単語をつけて話すものが手話であると誤解され続けています。

日本手話が、日本のろう者で用いられている自然言語である以上は、手話を学ぶ際には、英語や他の外国語を学ぶのと同様に、文法の理解も必要ですし、言語習得理論に則った会話の学習も重要になります。だからこそ、学術機関である大学で、手話言語学等の学術的成果を踏まえた授業を用意する必要がありますし、体系だったカリキュラムを用意する必要があります。

群馬大の先進的な取組み

手話サポータープロジェクトの立ち上げ

　群馬大学では、教育学部の金澤貴之教授を中心に、群馬県との共同事業として、2017年度から日本財団助成「学術手話通訳に対応した通訳者の養成」事業（手話サポーター養成プロジェクト）を立ち上げました。本事業では、高等教育機関における聴覚障害学生の手話通訳ニーズへの対応の充実を目指しています。学術レベルの手話通訳者養成の具体的施策として、これまでの本学の聴覚障害学生支援の基盤を活かしつつ、4年間の養成カリキュラムを通して手話通訳が可能な学生（手話サポーター）の養成を行いつつ、地域の手話通訳者（有資格者）のための高等教育機関向け手話通訳研修を行っています。
　また本事業は、大学で養成した手話通訳者が地域で「学術手話通訳者」として活躍する、地域連携モデルとして広く全国に示すことを目指します。

プロジェクトの概要と取組み

　プロジェクトの主な取組みをご紹介します。

１）学生向けの手話通訳者養成

①学部１年生向けに手話習得のための講義の大幅な新規開設。
②2年生～3年生向けに手話通訳技術を身につけるための講義を開設（厚生労働省のカリキュラムに準拠）。
・本講座修了の学生は、群馬県の認定により、全国手話通訳統一試験の受験資格を付与。統一試験に合格し、群馬県の試験にも合格すれば有資格者に。
・課程修了後、４年次に「手話サポーター」として聴覚障害学生の支援者として活動。

２）地域貢献

①地域の手話通訳者向けに学術手話通訳養成研修講座を開講
②公開講座「手話で学ぶ手話学（ろう者学）」の開講
③シンポジウムを年一回開催

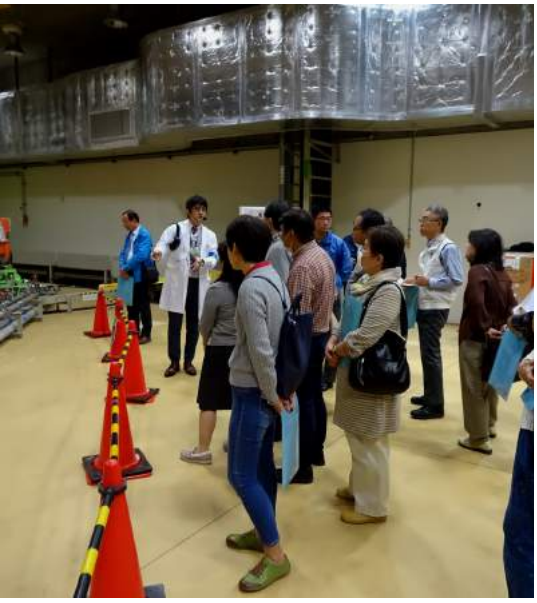
３）研究開発

手話指導および手話通訳養成のためのテキスト・カリキュラムの開発

　このような取り組みを行っていくことで、本学における学術手話通訳者の育成のみならず、全国の大学で同様の取組みが広がり、手話通訳養成が進んでいくことが期待されます。

Media-pick up

～１０月にメディアに紹介された群大の話題～



群馬大学重粒子線治療見学会

桐生キャンパス学園祭「群桐祭」

GLAST研修

- 研究成果　医学部附属病院　医療画像の共有システムを開発
- 研究成果　医学系研究科・白尾智明教授　脳が記憶を保つ重要なメカニズムを解明
- イベント　中央図書館展示　「師範学校時代の資料で振り返る群馬の明治期教育」
- その他　医学部附属病院　群馬大学災害時業務調整担当職員（GLAST（Gunma university Logistic Active Support Team）隊員）養成研修を開始
- 地域連携　ぐんまプログラミング教育推進協議会の発足(県内の産学官17団体と共同)
- イベント　群馬大学重粒子線治療見学会の開催（10/20）
- 地域連携　出産後の禁煙支援組織「禁煙継続支援ネットワーク」12月に産学官民連携で立ち上げ
- 研究成果　理工学府・中沢信明准教授　高齢者見守りロボットを開発(桐生市建設業者ＦＡＳと共同)
- イベント　桐生キャンパス学園祭「群桐祭」の開催（10/20、21）

行　事　~10月・11月・12月~

11月 NOVEMBER

5-25　中央図書館ギャラリー展示
「前橋と古利根川Part2」

8,9　生体調節研究所国際シンポジウム

10　公開講座「トークカフェatPLUS+アンカー
アートカフェin桐生④」

12　NHK大学セミナー
「パックンマックン グローバル人材のホント？!」

14　前橋商工会議所まちなかキャンパス
「細胞死の科学とがん」

23,24　荒牧祭

24　中央図書館　群大版ブラタモリ第2弾
「前橋と古利根川Part2:荒牧キャンパスの堰跡を巡る」

27-　中央図書館特別展示「群馬県の古墳発掘の父・尾崎喜左雄博士展Part3」（-12/21）

28　前橋商工会議所まちなかキャンパス
「気管支喘息：その病態から治療まで」

12月 DECEMBER

1,15　公開講座「Rで学ぶ統計学の基礎」

3　中央図書館アゴラカフェ・ミニレクチャー
「アジアのネットカフェから見るインターネット利用の多様性」

6　保健学研究科国際シンポジウム
「モンゴルにおけるリハビリテーションの発展を目指して－遠隔教育の可能性を探る－」

8　公開講座「トークカフェatPLUS+ アンカーサイエンスカフェin桐生⑤」

9　中央図書館 尾崎喜左雄博士展トークショー
（清水群馬大学教育学部同窓会長・右島群馬県立歴史博物長）

14　前橋商工会議所まちなかキャンパス「ここまでできるようになったバイオテクノジー」

1月 JANUARY

18　前橋商工会議所まちなかキャンパス
「肥満、糖尿病対策の現状とこれから」

寄附のお願い【群馬大学基金】

本学では国立大学を取り巻く環境の変化に対応しつつ、学生に対する支援、教育研究の質の向上及び社会貢献活動の充実を図ることを目的とした『群馬大学基金』を平成28年10月に創設いたしました。群馬大学基金は皆様からのご寄附によって運営され、本学を卒業された皆様、保護者の方々をはじめ、群馬大学にゆかりのある個人、企業・団体等の皆様等々からご支援をいただき、３つの事業（別表参照）に活用させていただきます。
そして、グローバル化に対応した教育研究を推進するとともに、地域の発展に貢献することを目指していきます。

（別表）　（平成30年9月30日現在）

寄附による主な事業	これまでの寄附金収入 ※千円以下四捨五入
（１）学生の修学支援に資する事業	26,778,000円
（２）大学運営全般に係る事業	45,381,000円
（３）重粒子線治療の普及・発展に資する事業（重粒子治療基金含む）	745,397,000円

※ご寄附の際は、３つの事業のうちどれかをご指定ください。

みなさまのご理解とご支援を心よりお願い申し上げます。
詳細については、以下リンク先からご覧ください。
【群馬大学基金HP】・【2017年度活動報告書（PDF）】

発行元
国立大学法人群馬大学 広報本部
Tel:027-220-7010,7011
E-mail:s-public@jimu.gunma-u.ac.jp
URL:http://www.gunma-u.ac.jp/

発行日　2018年11月15日

Copyright(C) 2018 Gunma University All rights Reserved